

『看護のための教育学』 実践者である 看護職や教員が 手元に置いて活用すべき書

編著：中井俊樹・小林忠資／定価：本体 2,200 円＋税
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



「看護のための教育学」とは、何の変哲もないタイトルだが、中身は「看護師こそ教育学を学ぶ必要がある!」という強いメッセージが一貫して構成の根底に存在する。

著者の1人、中井俊樹氏は大学における教授法や、教職員のディベロプメントに多数の業績をもつ教育学のプロフェッショナルである。

中井氏は、2007年、当時勤めていた大学の附属病院看護部から臨地実習指導者への教育手法の伝授を依頼されたことを端緒に、認定看護師教育課程、県看護協会、看護師養成校への講義を担うことで、看護職になるために必要な教育学とはどのようなものかについて検討を重ねてきた経緯があり、看護への造詣が深い学識者の1人である。

看護職が遭遇する臨床現場の体験のなかには、新人教育・患者指導など教える場面が非常に多いにもかかわらず、とかく暗黙知が多い看護実践では、教育者は長年、経験的に教えることを身に着けてきた。そのことが当たり前であった時代は終わったと感じさせてくれるのがこの本だ。

本書は、一般の大学教員ではなく、実践者である看護職が教育学の知見を活用する方法を説くテキストである。内容は、4部で構成されており、いずれも教育学の理論を平易な言葉で解説し、多すぎず、しかももれなくダブリなく知っておくべきことが網羅されている。第1部〈人の発達と学

習〉では、対象を理解するための基本的な知識から視野の拡大を導き、自己の発達へと関連付けている。次に第2部〈指導の基本〉、第3部〈さまざまな指導の工夫〉では、より具体的な指導設計や評価方法、さらに双方向の学習技法について示されていて、すぐに使えるノウハウが満載である。第4部〈学習とキャリア開発〉は、看護学生に未来の自身を描くことを方向づけており、ぜひとも加えてほしかった内容となっている。さらに、各章の最後にワークが設けられていて、個人およびグループで活用すれば学習の補完、強化ができるようになっている。

読者の想定は、臨床に出る前の準備(レディネス)として看護学生を対象としているが、ここが重要である。なぜなら、看護とは、患者1人ひとりの固有の人生の物語に寄り添う仕事であり、これらの学習が、対象理解を深め、実践者としての自身の体験を内省し、学び続ける姿勢すなわち自己教育力の萌芽となるからである。このことは生涯学習・キャリア開発を志向する心が折れない看護職を育てる意義も併せもつ。

本書の役割や効果から、私はむしろ看護師養成機関の看護教員や施設の教育担当者の手元に置いて活用してもらいたい。特に、看護教員が1年を通じた授業設計に、教育学について学習する機会を組み込むうえで、最適のテキストであろう。